

新潟大学教育人間科学部附属新潟中学校 生き方を求めて学ぶ力を養うとともに、 自主独立・協同の精神を育む。

自主独立・協同

学校生活のスローガンとして、自ら進んで取り組み、自分の考えをしっかりとちながら、自分なりに判断していくという「自主独立」、そして他者を尊重し共に向上するという「協同」を掲げています。これにもう1つ「創造」というキーワードを加えた重点目標を、指導の基本として掲げています。

例えば演劇の発表会ですと、市販のものではなく自分たちで脚本をつくったり、照明をどう当てるかを話し合ったり、その他にも音響、衣装、キャストそれぞれのもち場で自主独立・協同の精神を発揮する機会があるかと思います。

学校行事で日頃の成果を発揮する

生徒が「行事の多いところが学校の面白いところ」と言うくらい、学校行事に力を入れています。

「総合的な学習」では、共生をメインテーマに、1年生は環境、2年生は異文化理解、3年生は福祉について、個人の課題をもって学習を進めています。そして2年生では集大成の1つとして、「沖縄への旅」を実施しています。そのとき子どもたちいきなり異文化を追求しようと言うのではなく、異文化に興味をもてるような活動を事前に十分に行うことを大切にしています。そして実際に自分で現地を訪ね、その土地の人とじっくりとかかわりながら、課題を解決していきます。ここでも、どこに注目するか、現地でどう活動するかななどを子どもたちが自ら企画します。

制服がない！

ほかに自主性を表す例として、「制服の

自由化」があげられると思います。創立50周年記念に「自主独立とはなんぞや？」という問いからプロジェクトを行ったのですが、その一環として制服の意味を考えたのがそもそもの発端です。1年間くらいの移行期間があって、今は完全に自由になりました。今の生徒は入学当時から自由化になっていましたが、全員同じものを着なければならないという必然性を感じている子どもはほとんどいないようです。制服がある場合、女子は冬場寒くてもズボンではなくスカート履かなければならないということがあったりするようですね。服装が自由ですと、自分でどれがいいか選択する幅は多分にあるわけですから、いい面があります。ただ、制服がないことの意味を忘れて形だけの自主性にならないよう、生徒同士で日頃の行動を顧みたりもしています。

刺激あふれる学び舎

多くの地区から生徒が通う点も、附属中学校の特色です。現在、附属中学出身の教員が当校にいますが、彼はよく言っています。「中学時代は様々な生徒がいて、



林 順一 副校長



それが大変刺激になった。そして今もなお中学時代の友人と付き合いがあり財産だ」と。いろいろ情報を発信してくれる仲間がいるものですから、やはり凄く刺激し合える環境だと思います。

さっきの学校行事にしても、普通は教師が大体お膳立てをしておいて、子どもたちはその枠の中でやっていくということが多いようです。当校のように、1から生徒が作っていく経験ができるというのも珍しいのではないのでしょうか。もちろんその分、子どもたちは大変だと思いますが、喜びも大きいのです。

自主性を尊重することの大切さ

生徒の自主性に任せるといのは、我々にとってもかなり力があるし、そのほうが実は大変なんですよ。

子どもたちは取り組むことが明確になると、お互いにアイデアを出し合って実にいろんなことを試行錯誤します。しかしやる意味が見い出せないと、なかなか動かない。その代わり目的が明確になればとことん取り組むので、あとは大人としてのアドバイ



演劇発表会に向けて、休み時間返上で稽古に励む。なかなかの迫力。

スを、我々も一緒に楽しみ考えながらしていきます。楽しい作業ではありますが、どちらかというと、よいことばかりではなく、教員にとっての厳しさもありますね。

新たな附属学校の創造に向けて - 附属養護学校との関わり -

5年くらい前から、附属中学校の生徒が休み時間に附属養護学校へ遊びに行ったり、あちらが遊びに来たりしたことが発端となって、今は養護学校の行事“ふよう祭”に参加しています。

しかし、附属養護学校の子どもたちがどう生活しているのか、どう活動しているのか、生徒に分からないことがあります。そういった点を、今後お互いの交流を中心に理解を深め、共生の心をもって創造性豊かな子どもの育成を目指していきたいと、我々は考えています。

1月11日には旭町にある有壬会館で、「自立と共生を考える教育フォーラム」を開催いたしました。保護者からも後押ししていただき、多くの方々から参加していただきました。

附属小学校、中学校、養護学校は、この教育改革期、3校が同一敷地内にあるという環境を生かし、フォーラムを手始めに、新たな附属学校の創造を目指し、積極的にチャレンジしていきます。

(聞き手：石坂妙子、川瀬知之、村越啓子、荒木理恵)



自分たちでつくった演劇の台本。何度も話し合って修正を加える。



田中恒夫 先生